

# トロロプ、エレン・ターナン、ディケンズ (Trollope, Ellen Ternan, and Dickens)

齋藤九一  
(Kuichi SAITO)

## 1 はじめに

ディケンズ (Charles Dickens) とトロロプ (Anthony Trollope) の伝記的ならびにインターテキスト的な関係にここしばらく関心を寄せている。トロロプ (1815-82) はディケンズ (1812-70) より3歳若いだけだが、作家として社会的に認知されるのが20年ほど遅れたために、ほとんど別世代の作家のように見える。その意味でトロロプをディケンズの後輩作家と言ってよいと思うが、これまで私は、トロロプの作品・手紙・批評文を基にして、「後輩作家」トロロプがディケンズをどう見たかについて探るとともに(「トロロプから見たディケンズ」参照)、二人の具体的な作品の相互関係についても論考を発表してきた(「マードル氏とメルモット氏」および「ディケンズの『二都物語』とトロロプの『ラ・ヴァンデ』」参照)。

そこで今回は少し角度を変えて、ディケンズ自身ではなく、ディケンズの生涯の最後の13年間に重要な意味を持った一人の女性とトロロプの関わりについて先行研究を参照しつつ考察し、この二人の作家をめぐる論考をさらに一歩進めたいと思うものである。

## 2 ロビンソン夫人への手紙

1878年6月6日付でトロロプがロビンソン夫人 (Mrs. Robinson) に宛てた次のような手紙がある。

6th. June—1878—  
SQUARE.

39, MONTAGU

My Dear Mrs. Robinson.

I shall never dare to look you in the face again. I am going to Iceland! Last year it was South Africa. Does it not sound like—“Greenlands rocky mountains and Afric’s sultry plains.” You’ll think I am no better than a hymn. I cannot help going for various reasons. I suppose the 11 July would be too late for you? I shall be back in time for that; —probably for Tuesday 9th. But no doubt

you have everything settled, and I can only say that in future you had better trust to some old gentleman less given to a vagabond life.

Yours most faithfully and  
most penitentially

Anthony Trollope

文面から推測するに、トロロブは手紙の受取人ロビンソン夫人と親しい間柄であり、昨年に続いて何かの行事に招かれたが、前は南アフリカへの旅、今回はアイスランドへの旅とそれぞれ日程が重なってしまったということのようである。そのため日程をアイスランドから帰った後に変更することを提案しているのだが、トロロブ書簡集の注釈を参照すると、提案通り7月11日に、トロロブはロビンソン夫人の夫が共同経営者の一人となっている学校 (Margate High School) の運動会 (annual sports competition) で賞を贈呈する役を果たしたとのことである。文中の「グリーンランド云々」という文句はある賛美歌の歌詞のもじりで、トロロブが自らの東奔西走ぶり (“a vagabond life”) を自嘲したものである (*The Letters of Anthony Trollope*, vol.2, 779-780)。

さて、この学校経営者ロビンソン師 (the Reverend George Wharton Robinson) の夫人エレン・ロビンソンの旧姓はターナンである。すなわち、トロロブの文通相手はエレン・ターナン (Ellen Ternan) に他ならない。

エレン・ターナン (1839-1914) という人物については改めて述べるまでもなく、舞台俳優一家の三人姉妹の一人で、1857年8月のディケンズとの初対面以来 1870年6月の彼の死に至るまで、ディケンズの人生の最後の 13年間に大きな意味を持った女性である。二人は遅くとも 1860年代には愛人の関係にあったようである。このことは、ディケンズ生前はもちろん死後においてもある時期まで、近親者以外には秘密扱いにされていたのであり、例えば、ディケンズの最初の伝記であるジョン・フォースターの『ディケンズ伝』(John Forster, *The Life of Charles Dickens*, 1872-4) には記述がない。著者フォースターはディケンズの最も親しい友人の一人であったからエレン・ターナンの存在を知らないはずはなく、彼のディケンズ伝にこの件の言及がないのは意図的なのである。

エレンがロビンソン師と結婚したのは、ディケンズ死後6年目の 1876年であった。アントニー・トロロブがロビンソン夫人としてのエレンと家族的なつき合いがあったのは上記の手紙で推測できるのであるが、それでは、そもそもトロロブが彼女に初めて会ったのはいつ頃だったのか、また、それはどのような状況であったのだろうか。この小論では、アントニー・トロロブがディケンズ生前にどの程度エレン・ターナンと関わりがあったのか、そしてそのことがトロロブのディケンズ評価にどのように関係したと考えられるか、などについて検討したいと思う。

しかし、トロロブとエレン・ターナンの関わりを考える前に、エレンの姉フランセス(すな

わちファニー)・ターナン (1834-1913) との関わりを述べる必要がある。

### 3 ファニー・ターナンとトロロプ家の人々

ウィルキー・コリンズ (Wilkie Collins) がディケンズと協力して書きディケンズ自身がプロデューサー兼主演を演じたアマチュア演劇『凍った海』 (*The Frozen Deep*) の1857年8月のマンチェスター公演にプロの俳優であるターナン家の人々も参加した。これがディケンズとターナン家、とりわけエレン・ターナンとの関わりのはじめであることはよく知られている。

一方、ターナン家とトロロプ家の関わりが始まるのは、1858年9月にエレンの姉ファニー (Fanny Ternan) が母とともにフロレンスへ音楽修行に行った時からである。(妹のマリア (Maria) とエレンは同行せず、英国で舞台に出ている。) ファニーが向かったフロレンスには、トロロプの母と兄が以前から住んでいた。

イタリアでファニーがアントニー・トロロプの母で作家のフランセス (Frances Trollope, 1779-1863) および兄で文筆家のトマス (Thomas Adolphus Trollope, 1810-92) に会ったのは、ディケンズの紹介状による。そのことはたいていのディケンズ伝に記載されているが、例えば、エレン・ターナンとディケンズの間を詳述した『見えない女』の著者クレア・トマリ (Claire Tomalin) は以下のように書いている。

At the end of September Mrs. Ternan and Fanny left for Italy, armed with letters of introduction from Dickens to Anglo-Florentine acquaintances, among them the elderly novelist Frances Trollope, living there with her son Tom, also a writer and occasional contributor to *Household Words*. (*The Invisible Woman* 117)

ちなみに、1859年3月にはエレンもフロレンスを訪れて母と姉に一時合流しているのだが (Tomalin, 121-2)、この時期にエレン自身がトロロプの母や兄とどの程度面識があったかは定かでない。

ところで、*Oxford Reader's Companion to Trollope* (1999) では “Fanny went to Florence, with financial help from Dickens and assistance from Trollope, to study singing.” (548) という記載がある。このトロロプは特に説明がないのでアントニー・トロロプを指すと考えられるが、トロロプの援助でというのは控えめに言っても疑問のある記述と思われる。これではまるで、早くもこの時期にファニーがディケンズとトロロプの双方から援助を受けたように見えてしまうからである。

アントニー・トロロプがどのようにしてファニー・ターナンを知ったかについてトマリ (Tomalin, 154) が、R・H・スーパー (R. H. Super) によれば、アントニ

ーがファニーと知り合うきっかけを作ったのは兄トマス・トロロブであったようである。

On April 13, [1865,] Tom's wife Theodosia, who had long been ailing but had not been actually an invalid, died unexpectedly in Florence. Two days later Anthony made a quick trip out, and by April 30 was back at Waltham House, accompanied by Tom's daughter Bice. ... Characteristically, Rose and Anthony took their ten-year-old niece warmly into their home; since she loved music, they engaged Frances Eleanor Ternan, older sister of Dickens's mistress the actress Ellen Ternan, as her music teacher. Frances Eleanor had been a music student in Florence some years earlier, and had come to know Tom.... (It was through Tom's introduction that she came to know Anthony and Rose back in London.) (*The Chronicler of Barsetshire* 195)

以上はファニー・ターナンとトマスおよびアントニー・トロロブの関わりの始まりである。ファニーの妹エレンとアントニー・トロロブとの関わりが明示的になる事情については以下に述べる。

#### 4 1865年のクリスマスをめぐる幾つかの「物語」

上述のR・H・スーパーからの引用でわかるように、1865年5月にファニー・ターナンがアントニー・トロロブの兄トマスの娘ビーチェの家庭教師となる。トマスの妻は一人娘を残して4月に死去したのであった。ファニーは、7年前の声楽留学の際に、フロレンスでトマス夫妻およびその娘ビーチェに会っているから、旧知の間柄であるが、今回、ビーチェの家庭教師としてファニーを推薦したのはアントニー・トロロブであった。イタリアから帰って7年の間に、ファニーはトマスの弟アントニー・トロロブ夫妻の知遇を得ており、アントニー・トロロブがトマスの先妻の死に際して預かっていたトマスの娘ビーチェの家庭教師にファニーを招いた、というわけである。

さて、その翌月に当たる1865年6月に、ディケンズとエレン・ターナンにとって一つの大きな出来事があった。ステーブルハーストでの鉄道事故にディケンズ、エレン、エレンの母が巻き込まれたのである。この有名な事故についてはディケンズ伝その他に詳しいので詳述しないが、ディケンズが、事故の3日後に、チャリングクロス駅長に宛てて、エレンが事故の際に装身具を紛失したことを申告している手紙がディケンズ書簡集にあり、それに付けられた編者の注によれば、“Ellen Ternan was injured in the accident, probably in one arm and shoulder; she and her mother were returning from France with CD.” (*The Letters of Charles Dickens*, vol.11, 53)とのことである。

そして、この年の12月、クリスマスのダンス・パーティーにアントニー・トロロプはファニーとエレンを招待したのである。この時がアントニーがエレンに会った最初であろうか。エレンは事故の傷もまだ完全に癒えない頃であるが、クリスマスの代名詞のようなディケンズではなく、トロロプのもとで楽しいクリスマスの一時をエレンが過ごしたというのなかなか皮肉である。フレッド・カプラン(Fred Kaplan)の『ディケンズ伝』にもクレア・トマリンの『見えない女』にもこのクリスマスへの言及がある。

Though the “patient” [i.e. Ellen], whose health never fully recovered after the Staplehurst accident, may have enjoyed the recuperative sunshine of Kent, she had a comfortable residence of her own at Amphil Square. By December 1865 Ellen felt well enough to attend a dancing party, hosted by the brother-in-law-to-be, Anthony Trollope, with scarlet geraniums in her hair. In January 1866, she moved to Elizabeth Cottage in Slough, seventeen miles from London, across the river from Windsor and three miles from Eton.... (Kaplan 500)

Some time in the late summer Thomas Trollope appeared at Waltham Cross and renewed his acquaintance with Fanny. When he returned to Florence in October he took Bice with him, but the governess promised to correspond with her pupil, and was as good as her word. Friendship was now well established between all the Trollopes and Miss Ternan, and when Christmas came she was invited to a ball and kindly told she might bring her younger sister. Fanny’s description of the ball, or rather of the matching dresses and flowers worn by herself and Nelly—“pale green silk covered with tarlatane of the same colour, trimmed with white lace and dewdrops, with scarlet geranium and white heather in her hair”—has something pathetic about it, because it is one of the very few occasions on which we hear of some ordinary girlish enjoyment in the lives of the sisters. For one evening Fanny, so quick-eyed, so industrious, so eagerly pressing forward, and Nelly, with her burden of secrecy, were able to appear almost as simple and untouched as a pair of Barchester girls. (Tomalin 155)

髪飾りとしての「赤いゼラニウム」という印象的な細部の共通点を除けば、このエピソードの扱い方が二人の間では違うように思われる。すなわち、カプランのように「ディケンズの物語」の中で語るか、トマリンのように「エレン(すなわちネリー)・ターナンの物語」の中で語るかによって、このクリスマスのエピソードの評価も違ってくる。カプランの「物語」では、このパーティは、エレンが回復の過程で移動する幾つかの場所の一つであり、また、彼女の回復の度合いを示す一つの兆し(「ダンス・パーティーに出席できる

くらい回復した」として触られているだけで、文章はすぐに次の場所の言及へと移動する。それに対して、トマリンの「物語」では、一つの段落が割り当てられ、姉ファニーがトロロブ家とよい関係を築きつつある中での出来事であり、エレンがトロロブ夫妻に暖かく受け入れられたことが示される。興味深いのは、トマリンによる「エレンの物語」が、ここでは「トロロブの物語」をも取り込んでいることである。すなわち、この日の幸せなファニーとエレンをトマリンはトロロブの代表的連作バーチェスター物語の登場人物になぞらえているのである。エレンをディケンズの代表作の一つ『大いなる遺産』のエステラに喩えるのは「ディケンズの物語」の常套手段であるが、トマリンは、エレンを「ディケンズの物語」ではなく「トロロブ(家)の物語」に置き直すことによって、彼女をディケンズの呪縛から解放しようとしているかのようである。

## 5 まとめ：「彼は私にとって完璧な強壯剤です」（ディケンズ）/「ディケンズは英雄ではありませんでした」（トロロブ）

さて、トマス・トロロブの娘ビーチェは一時イギリスのアントニー・トロロブ宅に滞在した後フロレンスに帰り、ファニー・ターナンもビーチェの家庭教師として再度フロレンスへ赴くことになるが、これにはアントニー・トロロブ夫妻のすすめがあったようである。ステビンスの『トロロブ家の人々』によれば、トロロブ夫妻はファニー・ターナンをビーチェの家庭教師としてばかりでなくトマス・トロロブの後妻候補としてもイタリアに送り出したのであった。

They [i.e. Anthony Trollope and his wife] were convinced that her [i.e. Fanny's] clever talk was exactly suited to Tom's tastes: in beauty and goodness she was everything one could ask, and for her own sake she ought to be out of England and away from the scandal which linked her sister Ellen's name with that of Charles Dickens. (Stebbins 234)

ファニー・ターナンとトマス・トロロブの結婚式は1866年10月29日にパリで行われ、エレン、マライア、母、そしてアントニー・トロロブ夫妻も出席した。

ノーマン・ページ (Norman Page) はエレン・ターナンとディケンズ一族との関係について、“... it seems...legitimate to regard her [i.e. Ellen Ternan] as a kind of honorary, if largely unacknowledged, family member.” (“Introduction” to *Charles Dickens: Family History*, vol.1, xvi) と言っているが、それとは対比的に、姉ファニーの結婚によって、エレンはトロロブ家のまぎれもない“family member”となったわけである。ファニーとトマス・トロロブの結婚の様子をエレンから報告されたディケンズは、トマスへのお祝いの

手紙で、自分が8年前にファニーをトマスに紹介して彼が生涯の伴侶を見つける「無意識の手段」(the unconscious instrument) となったと言っている (Tomalin 165)。その言い方を借りれば、1865年のアントニー・トロロブは二人を結びつけるのに非常に「意識的な」役割を演じたのであった。ちなみに、トロロブ家の人となったファニーをディケンズは煙たく思い始めたらしく、また、ファニーの方でも、エレンとディケンズの間を快く思わなかったようである (Tomalin 165-6)。

さて、まとめとして、ディケンズとトロロブそれぞれの手紙を引用しつつ、相互の評価の差について触れておきたい。

1869年5月6日、後から考えれば死のほぼ1年前になるが、ディケンズは、トマス・トロロブ宛ての手紙の中で、トマスの弟アントニー・トロロブをアセニウム・クラブで見かけたことを書いている。

I saw your brother Anthony at the Athenaeum not long ago, who was in the act of reading a letter from you. He is a perfect cordial to me, whenever and wherever I see him, as the heartiest and best of fellows. (*The Letters of Charles Dickens*, XII, 351).

この手紙の前半でディケンズは、アメリカ旅行の疲れも癒えぬままに始めたイギリスでの公開朗読会で倒れてドクターストップがかかったことを述べているので、トロロブを“a cordial” (強壯剤) に喩えたものと思われる。1867年11月に渡米するディケンズの送別会でトロロブは幹事の一人であったし、また、1868年4月22日にニューヨークで、まさに帰国しようとしているディケンズを、公務でアメリカに到着したばかりのトロロブがわざわざ見送って、大いに感激させてもいたのだから、このような好意的なトロロブ評価も当然のことかもしれない。

しかし、少なくとも1865年のクリスマスから1870年6月のディケンズの死までの4年半、ディケンズはトロロブとエレン・ターナンの間で面識があることを知らなかったはずはない。クリスマスのダンス・パーティのことをエレンがディケンズに隠したとも思われぬし、また、1866年10月末のファニーとトマスの結婚後はターナン家とトロロブ家が縁戚になったのだから、ディケンズの方で、エレンと自分の関係をトロロブが知っていることは承知のはずである。その上で、ディケンズはトロロブを「いいやつ」だと言っているのだから、トロロブがこの件でディケンズを批判するような言動を表立ってしなかった、あるいは、してもディケンズには知られなかったということになるだろう。

一方、1870年6月にディケンズが死んで、その1年8ヶ月後の1872年2月27日にアントニー・トロロブは、ジョージ・エリオット (George Eliot) 宛の手紙の中で、出版されたばかりのジョン・フォースターの『ディケンズ伝』について次のように書いている。

Forster's first volume is distasteful to me, --as I was sure it would be. Dickens was no hero; he was a powerful, clever, humorous, and, in many respects, wise man; very ignorant, and thick-skinned, who had taught himself to be his own God, and to believe himself to be a sufficient God for all who came near him; --not a hero at all. Forster tells of him things which should disgrace him, --as the picture he drew of his own father, & the hard words he intended to have published of his own mother; but Forster himself is too coarse-grained, (though also a very powerful man) to know what is and what is not disgraceful; what is or what is not heroic. (*The Letters of Anthony Trollope*, II, 557-8)

“Dickens was no hero.” という表現はディケンズの自伝的傑作『デイヴィッド・コパーフィールド』の有名な書き出し (“Whether I shall turn out to be the hero of my life ...”) を踏まえたかのようなものである。それにしても、ディケンズとトロロプの相互の評価におけるこの落差は実に興味深い。もちろん、トロロプが述べているように、ディケンズが自分の父や母を悪し様に言ったことにトロロプが義憤を感じたということもあるだろう。しかし、このディケンズ評を理解する鍵の少なくとも1つは、エレン・ターナンをめぐる事柄であろうと思われる。ポール・シュリッケ編 *Oxford Reader's Companion to Dickens*. は、トロロプに関する短い項目の最後で、“Apart from professional interests, the two [i.e. Dickens and Trollope] had an interesting personal connection: Trollope's brother Tom married Fanny Ternan, sister of Dickens's beloved Ellen Ternan.” (575) と述べている。すなわち professional なものと personal なものを区分けした書き方である。しかし、彼らの personal な関係が professional な関係に影響しなかったという保証はない。トロロプとエレンとディケンズをめぐる伝記的な事実は、単に “interesting personal connection” というだけではなく、ディケンズという人物を同業者トロロプがどう見たかという判断に関わる重要な要素として、この二人の作家の伝記的ならびにインターテキスト的な関係を検討する際に念頭に置くべきものと思われる。

## 参考文献

- Hall, N. John, ed. *The Letters of Anthony Trollope*. 2 vols. California: Stanford University Press, 1983.
- House, Madeline, Graham Storey, and Kathleen Tillotson, gen. eds. *The Letters of Charles Dickens*. 12 vols. Oxford: Clarendon Press, 1965-2002.
- Kaplan, Fred. *Dickens: A Life*. London: Hodder and Stoughton, 1988.
- Page, Norman. “Introduction” to *Charles Dickens: Family History*. 5 vols. London:



- Routledge/Thoemmes Press, 1999.
- Schlicke, Paul, ed. *Oxford Reader's Companion to Dickens*. Oxford: Oxford University Press, 1999.
- Stebbins, Lucy, and Richard Poate Stebbins. *The Trollopes: The Chronicle of a Writing Family*. 1945. New York: AMS Press, 1966.
- Super, R.H. *The Chronicler of Barsestshire: A Life of Anthony Trollope*. Ann Arbor: The University of Michigan Press, 1988.
- Terry, R.C. ed. *Oxford Reader's Companion to Trollope*. Oxford: Oxford University Press, 1999.
- Tomalin, Clair. *The Invisible Woman: The Story of Nelly Ternan and Charles Dickens*. 1990. Harmondsworth: Penguin Books, 1991.
- 齋藤九一. 「トロロプから見たディケンズ」『上越教育大学研究紀要』第 19 巻第 2 号, 2000.
- . 「マードル氏とメルモット氏」『ディケンズ・フェロウシップ日本支部年報』第 24 号, 2001.
- . 「ディケンズの『二都物語』とトロロプの『ラ・ヴァンデ』」『ディケンズ・フェロウシップ日本支部年報』第 25 号, 2002.

出典： OTSUKA REVIEW 39 (2003)